

## 「われは三位一体の神を信ず」(ローマ11章32-36節)

### 1 三位一体の核心

三位一体という、ふだん聞き慣れない言葉が説教題に入っています。教会の暦で今日の日曜日は三位一体主日です。三位一体というのは、言葉としては三つ一組という意味です。三位一体の神というときには、イエス・キリスト、その父である神、そして聖霊を指します。そしてこれら三つは神として同じ共通の本質をもち、あくまでひとりの神ですが、三つの顔をもっている、三つの在り方において存在している、簡単に言えばそのような理解になります。三位一体主日は、神はただひとりおられるのではない、いろいろの在り方、いろいろの働きを通して私どもに関わってください。私どもを変えてくださる。こうした神への信仰を感謝と共に告白する、それが三位一体主日です。

神はただひとり孤独におられるのではない、独裁者のような方としておられるのではない、私どもと関わってくださいる神だということを、有名なイエスの譬話を一つ思い起こしていただくことで、はじめに明らかにしてみたいと思います。

それは放蕩息子の譬です(ルカ15章)。ご存じの方が多いと思いますが、あの譬の中の父親、お父さんを思い起こしていただきたいのです。この譬の中の父の在り方がただひとりおられるだけでなく私どもに関わってくださいる神、三位一体の神を明らかにしているように思います。

ある人に二人の息子がいて、下の息子が、父親から生前相続でもらった財産をみなお金に換え、それをもって遠くに行ってしまう。そこで放蕩三昧、とうとう財産をすっかりなくしてしまいます。そこに飢饉が起こり、彼はどうにも生きられなくなります。どん底で思い出したのは、お父さんの家のことでした。家で働く雇い人が有り余るパンを食べている姿が脳裏にうかび、彼は急に帰る決心をします。彼は帰ったときに父に言う言葉を考えて行きます。天に対してもお父さんに対しても罪を犯した、もう息子と呼ばれる資格はない、雇い人の一人にしてほしいと。その格好はぼろをまとい、裸足で、空腹のためかろうじて歩いているようなものだったでしょう。そうして帰ってきた息子を見つけたのはお父さんでした。こう書いてあります。「まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した」(20節)。物語はつづきますが、省略します。

思い起こしていただきたいのは、「憐れに思い、走り寄って」です。とくに「走り寄って」という言葉です。ここにはそれまでの父親とは別の姿の父親が描かれています。息子が出て行った後の父の様子は描かれていませんが、それを推察させるのは「まだ遠く離れていたのに父親は息子を見つけ」というくだりです。子どもを心配しない親はいません。ましてあんなふうにして出て行ってしまった息子です。彼の性格も父が一番よく知っています。父は地平線の彼方にいつも目を向けて帰りを待っていた。そこに父親の気持ちは表れています。ですからまだ遠くにいた息子を最初に見つけた

のはお父さんでした。しかしそれまでこの父親は、なるほどそういう息子を思う気持ちをもっていたとしても、動かなかったのです。この父親の姿にいま聖書の神の二重の在り方が重なって見えます。聖書の神は第一にこの父親のように、すべての根源としてあります。父は、放蕩のかぎりをつくした息子がそうであったように、人がそれを忘れるかどうかに関わりなくそこに存在します。存在しつづけています。曇ってはお日様が見えないからといって太陽が存在しないわけではないのと同じです。そういう神の存在です。それが一つです。もう一つは「走り寄っていく」神です。それは父としての尊厳を傷つけかねない軽々しい行動にも見えます。しかし神は、この父親がそうであったように、その憐れみのゆえに自分のその立っているところを離れ、自ら走り寄っていくのです。厳として存在している神と、走り寄っていく神、どちらも聖書の神、ひとりの神です。走り寄っていく神、この神を私どもはイエス・キリストにおいて知ります。厳として存在する神、この神を私どもはイエス・キリストの父である神として知ります。譬の父親が示している神は、自らに安らっておらず憐れみに動かされて走り寄っていく神です。これがイエス・キリストの神、イエス・キリストにおいて、聖霊をもって、つねに共にある神、三位一体の神です。聖書の神は、その憐れみのゆえに、私どもに関わる神、そうすることのできる神、聖霊と共におられる生ける神です。

## 2 すべての人を憐れむため

いま申し上げたことは、「三位一体の神」という言葉に、少し不慣れかも知れないが、その中身は、聖書の神、生ける神、イエス・キリストの神以外のことではないということでした。

ただこのことも申し上げておかなければなりません。三位一体という用語は、じつは聖書には出てこないということです。しかし聖書には、そうした神理解につながっていく箇所が旧約にも新約にもいくつもあるのです。代表的な箇所は礼拝の祝祷として使われているコリントの信徒への手紙Ⅱ3章13節です。「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように」。そして今日の聖書箇所、これも頌栄ですが、その一つと言ってよいと思います。

すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン(36節)。

この中で「出て」「保たれ」は補いの言葉です。元々の言い方は「神から、神によって、神に向かつて」です。いずれにしても三度神に言及し神を賛美しています。三位一体の神を賛美しています。かくて神を賛美するとき、聖書はつねに三位一体の神を賛美するのです。

この36節の賛美の言葉をもって、ローマの信徒への手紙は、一つの区切りをつけて

います。それは○章から始まりⅡ章で終わる、長い、そしてきわめて重要な段落が終わったことを示しています。この長いまとまりの結論が今日の聖書箇所最初の節になります。

神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです(32節)。

この一節だけではお分かりになりづらいと思います。少し説明します。教会がはじめてできた場所はエルサレムです。イエスを救い主として信じ受け入れ最初の教会員となったのはみなユダヤ人でした。しかし伝道が進んでいくにつれて、ユダヤ人以外の人々、聖書では異邦人(ユダヤ人から見て外国人)と呼んでいます。彼らが多数となり、やがてユダヤ人はほとんどいなくなります。

ユダヤ人たちは自分たちを割礼の民、神様に選ばれた特別の民だと考え、割礼を受けていない他の民族を差別的に見ていました。異邦人は神の救いの約束や契約にあずかっていない、律法をもたない、本当の神様を知らない、神の民ではないと。そうした意識は早い段階のユダヤ人キリスト者にもまだ少し残っていたようです(使徒言行録Ⅱ章、ガラテヤⅡ章)。いずれにしても「神の賜物と招き」(ローマⅠ章29節)を受けたユダヤ人から見れば、そうでない異邦人は、みな、不信仰、不従順であったのです。

しかしそれと全く逆のことが、ユダヤ人が教会から少なくなり異邦人だけになってくると起こります。イエスを神から遣わされた救い主と信じない、イエスを十字架につけてしまったユダヤ人たちこそ、不信仰、不従順のゆえに神から捨てられた、神の民としての地位を失ったのだと。かくて、どちらも、つまりユダヤ人も異邦人も、全人類が不従順の中に落ち込んでいる。みな罪の下にある(ローマⅢ章6節)。そこから逃れることはできない。「閉じ込められている」。パウロは私ども人間の現実をそのように描き出すのです。

しかしそうした事実確認によって私どもは何か暗い気持ちになって心を乱されるようなことがあってはなりません。じっさいそれはパウロの最後の言葉ではありませんでした。私どもの聞くべき最後の言葉ではありませんでした。私どもが聞くべき最後の言葉は「すべての人を憐れむため」という言葉でした。私どもの神は不信心な者を義とする神です(ローマ4章5節)。不従順なイスラエルを義とする神です(同Ⅱ章32節)。この神の、不信心な者、不従順な者、罪人に対する深甚なる憐れみ、これが私どもの聞くべき言葉です。これがイエス・キリストにおいて私どもに明らかにされた三位一体の神の根源的な思いなのです。

### 3 「主イエス・キリストの恵み・・・」

さきほど、いくつかある、三位一体の神を示唆する聖書箇所のうち、祝祷として用いられているコリントの信徒への手紙Ⅱ13章13節が代表的なものだということを書き上げました。

改めて注意していただきたいのは、「主イエス・キリストの恵み」から入っていることです。父なる神から入るのが、自然だとお考えかもしれませんが、そうではないのです。イエス・キリストの恵みから入らなければ、父なる神はどのような方が分からないのです。父が愛の神であるのが分かるのはキリストの恵みからです。父親が「走り寄っていった」ことではじめてこの父がどのような方であったのか。どのような思いをもって息子を待っていたのか分かるのです。すべての人を憐れむためというのもそれはただイエス・キリストの十字架と復活による救いの業を知ってはじめて理解することができるのです。主イエス・キリストの恵みから入る、私は救われたところから入る。それによってはじめて私どもは、全能の父なる神も、たんなるオールマイティの神、暴君のような全能者ではなくて、恵みにおいて、救いにおいてオールマイティということが知られるのです。

さて最後に、三位一体の神信仰のポイントのいくつかに触れて、今日の説教を終えたいと思います。

第1に私どもは、父なる神について、この神は創造者なる神であることを、たとえば使徒信条などで告白します。その通りです。創造者です。この告白によって同時に私どもは、造られたものは、いかなるものも神ではないことを知らされます。この世のどんなものも神ではないがゆえに、私どもはそれに支配されず、むしろ奉仕することができなのです。もう一つは私どももこの神によって造られたということです。生を貸与されたのです。貸与された、限られた生を、神によって与えられた使命に従って生きることが、私ども人間の生きる意味です。

第2に私どもは、イエス・キリストを主なる神として告白します。それは私どもが和解と平和の道を歩むことを意味します。イエス・キリストによって私どもは神と和解させられた。神は私どもの責任を問うことはせず、かえって和解のために奉仕する務めを与えてくださったのです。和解の福音を証しすることです。それは個人の生き方だけではない、国と国、民族と民族との関係についても言えることです。キリスト者の生は和解の生です。

第3に私どもは聖霊なる神について「命を与える聖霊」（ニカイア・コンスタンティノポリス信条より）として告白します。この命は復活の命です。聖霊は将来の救いの保証です（エフェソ一章14節）。ですから「聖霊を信ず」ということは、これによって私どもに何かこの世の力が増し加わるのではなくて、「きたるべき世の力を味わ」って（ヘブル9章5節、口語訳）、どんなときも希望を失わず、この世を歩んでいくということです。三位一体の神への信仰を基とし聖霊の力を与えられこの週の歩みを進めてまいりましょう。

(2018年5月27日)